

日蓮大聖人御書全集

じょうぞうじょうげんごしやうそく

浄蔵浄眼御消息

新版
2007
〜
2009

じようぞうじようげんごしじようそく

浄蔵浄眼御消息

けんじ こうあんき まつのどのふさい

建治・弘安期 松野殿夫妻

生 米 たわらひと うりこひと ねいも しなじな ものた そうら お

きごめの俵一つ・瓜籠一つ・根芋、品々の物給び候い畢

わんぬ。

らいとく なづ ちようじや み い わ み め こ

楽徳と名付けける長者に身を入れて、我が身も妻も子も、

よる ひる せ つか もの あま せ た

夜も昼も責め遣われける者が、余りに責められ、堪えがた

かく たこく い くに だいおう みやづか

さに、隠れて他国に行つて、その国の大王に宮仕えけるほ

切 者 な かんぱく な のち くに ちから

どに、きりものに成つて関白と成りぬ。後にその国を力と

わ もと しゆ くに う と とき もと しゆ

して、我が本の主の国を打ち取りぬ。その時、本の主、こ

かんぱく

み

おお

おそ

さき

あ

あ

く

の関白を見て大いに怖れ、前に悪しく当たりぬるを悔い

返

みやづか

ようよう

たから

ひ

ま

もの

かえして宮仕え、様々の財を引きける。前に負けぬる物の

おも

いま

いのち

生

励

ことは思いもよらず、今はただ命のいきんことをはげむ。

ほけきよう

ほけきよう

とうほう

やくしぶつ

法華経もまたかくのごとく、法華経は東方の薬師仏の主、

なんぼう

さいほう

ほつぼう

じようげ

いつさい

ほとけ

しゆ

しやかぶつとう

南方・西方・北方・上下の一切の仏の主なり。釈迦仏等の

ほとけ

ほけきよう

もんじ

うやま

たも

たみ

おう

おそ

ほし

仏の法華経の文字を敬い給うことは、民の王を恐れ、星の

つき

うやま

われ

しゆじよう

だいろうくてん

まおう

月を敬うがごとし。しかるに、我ら衆生は、第六天の魔王

そうでん

もの

じごく

がき

ちくしやうとう

お

こ

いき

吐

の相伝の者、地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気もつ

ちやうせきごくそつ

つ

せ

ほけきよう

かず朝夕獄卒を付けて責むるほどに、とかくして法華経に

か っ

しやかぶつとう

じつぼう

ほとけ

みこ

たま

懸かり付きぬれば、釈迦仏等の十方の仏の御子とせさせ給

ぼんのう

たいしやく

おそ

よ っ

えば、梵王・帝釈だにも恐れて寄り付かず。いかにいわん

だいろうくてん

まおう

まおう

さき

しゆ

いま

や、第六天の魔王をや。魔王は前には主なりしかども、今は

うやま

おそ

悪

ほけきよう

じつぼう

しよぶつ

ごげんざん

敬い畏れて、「あしゆうせば、法華経・十方の諸仏の御見参

い

おそ

かしこ

くよう

に、あしゆうや入らんずらん」と恐れ畏みて供養をなすな

ろくどう

いっさいしゆじよう

ほけきよう

付

り。いかにしても、六道の一切衆生をば法華経へつけじと

励

はげむなり。

みなひと

にく

そうろう

しかるに、いかなることにやおわすらん、皆人の憎み候

にちれん

ふびん

思

はるばる

さんちゆう

しゆじゆ

ものおく

給

日蓮を不便とおぼして、かく遙々と山中へ種々の物送りた

そうろう

いちどにど

び候こと、一度二度ならず。ただごとにあらず、ひとえ

しゃかぶつ

いか

たま

後

たま

に釈迦仏の入り替わらせ給えるか。またおくれさせ給いけ

おんきんだち

みほとけ

たま

ふぼ

みちび

る御君達の、御仏にならせ給いて、父母を導かんために

みこころ

いか

たま

御心に入り替わらせ給えるか。

みようしようごんのう

もう

おう

あくおう

おんたいし

妙莊嚴王と申せし王は、悪王なりしかども、御太子、

じようぞう

じようげん

みちび

たま

ふぼふたりとも

ほけきよう

浄蔵・浄眼の導かせ給いしかば、父母二人共に法華経を

ごしんようあ

ほとけ

成

たま

御信用有って、仏にならせ給いしぞかし。これもさにてや

そうろう

奇

おぼ

そうろう

候らん。あやしく覚え候。

かいこう

かた

つね

ひと

見

目かたち

すぐ

そうら

甲斐公が語りしは「常の人よりもみめ形も勝れて候い

うえ　こころ　なお　ち　えかしこ

なにごと

し上、心も直くて智慧賢く、何事につけてもゆゆしかり

ひと　と　果　無　な　あわ　おも　そうら

し人の疾くはかなく成りしことの哀れさよと思い候いし

おも　こ亡　ゆえ　はは　どうしんじや

が、またつらつら思えば、この子なき故に、母も道心者と

ちち　ごせしや　な　そうろう　おぼ　そうら

なり父も後世者に成つて候は、ただとも覚え候わぬに、

みなひと　にく　そうろうほけきよう　つ　たま

また皆人の惡み候法華經に付かせ給えば、ひとえにこれ、

亡　ひと　ふたり　おんみ　そ　すす　まい　そうろう

なき人の二人の御身に添つて勧め進らせられ候にや」と

もう　おぼ　そうろう

申せしが、さもやと覚え候。

さきぎひき　おも　そうら

前々はただあらましのことかと思つて候えば、これほど

おんこころざし　ふか　そうら　はじ　し　そうろう

御志の深く候いけることは始めて知つて候。また、

そうら

暗

やみ

つき

い

もしやのこと候わば、くらき闇に月の出ずるがごとく、

みようほうれんげきよう

ごじ

つき

あらわ

たも

つき

なか

妙法蓮華經の五字、月と露れさせ給うべし。その月の中に

しやかぶつ

じつぽう

しよぶつ

ないしさき

た

たま

ごしそく

あらわ

は、釈迦仏・十方の諸仏、乃至前に立たせ給いし御子息の露

たも

おぼ

くわ

もう

れさせ給うべしと思しめせ。委しくはまたまた申すべし。

きようきようきんげん

恐々謹言。

しちがつなのか

七月七日

にちれん

かおう

日蓮

花押